

◆2008年 12月

八木健選「七句」

1. 水上り鴨は木沓になりすます 田代青山
なるほど・・・蹴鞠をやらせてみたいね
2. 風力であいさつエコな秋桜 山下正純
環境にやさしいが過剰な挨拶
3. 篤姫がここにも居りぬ菊花展 山本 賜
至るところ篤姫に便乗の秋
4. 着替へして靴で御帰還七五三 高田菲路
ちぐはぐ感がなんとも
5. 魚心秘めて御歳暮届きけり 有吉堅二
水心もて御歳暮をしまひ込む
6. 混浴と知らず瞑目紅葉谷 杉村福郎
いい加減に出ないとふやけるじゃんか
7. 病院を今日は休んで日向ぼこ 前川敏夫
待合室でみんなが心配・・・風邪かしら・・・と

青山桂一

秋耕やわんさか来たる鴉どち
いい加減刈りしがゆへに?田と
秋闌ける休耕田も放棄田も

麻生やよひ

落葉掃き終へ竹箒逆立ちす
七五三祖父母の財布狙ひ撃ち
追はるるは不本意なりと稲雀

足立淑子

イメージとかなり違つた葉喰
冬の夜の鏡の奥にユダの顔
逢うてきた名残の足袋をひそと脱ぐ

有吉堅二

魚心秘めて御歳暮届きけり
割り勘の半端な数字年忘れ

飯塚ひろし

骨密度うすき身炙る焚火かな
煩悩がパジャマ着てをる年の夜
秤られて死んだふりする海鼠かな

井口寿々子

踏まないで小径ころがる団栗を
御佛の喰わん喰わんと紅葉寺
行く秋や僕がいるよと夫の声

稲沢進一

元旦や電子レンジのよく廻る
二着目は千円ぼつきりコート買ふ
賛成も反対もせず嘸かな

奥脇弘久

濡れ衣を干す束の間に片時雨
西の市アニメの顔も三度まで
千束の五差路を右へ三の酉

笠政人

ひつじ田の晴れて鴉の格闘す
物干しの切干にふと母匂ふ
老班はわが勲章ぞ文化の日

加藤澄子

錦模様の落葉にしやがむ百二歳
七五三銀杏黄葉を握りしめ

有富洋二

おでん種もぐりて声を殺しをり
寄鍋の一大決心蓋を取る
虫歯診るマスク美人の多かりき

安藤淑子

競る声を鮫鰯横目で睨め返す
破れ障子満月丁度良き位置に
ガラス工房の熟柿を吹いてみたくなり

井口夏子

耐えるすべ赤に写して寒椿
秋扇ぎ鬼女にもなりし淑女にも
満月にハートマークを速達で

今城夏枝

寄せ鍋の煮え講釈も煮えたざる
枯薄風の吹くまま野に泳ぎ
初霜にすくみ畑の野菜たち

越前春生

木の葉髪忘れ上手になつてをり
気安さは女人のみない鮫鰯鍋
熱爛や晩年はまだ先のこと

加藤 賢

木の葉降りやまずと言へり清掃員
頭に木の実落つ地に屈み長電話

可知豊親

あるまじき巫女の副業神の留守
三たり子を上手に拵へ七五三

草薙一朗

蟹文字の街になりゆく銀座かな
キッチンに変る教壇文化の日
仏語では色即是空や蟬の殻

小杉 隆

小春日や百円ショップに子規芭蕉
ブラジルのおじやの味は明治かな
焼棒杭つけ火は学友忘年会

桜井宇久夫

懐のわびしく秋の古本市
煩悩の衆生の極み秋叙勲
寄鍋や今夜も豆腐多くして

清水呑舟

聖夜劇子には見えてる遠き母
煤逃を見透かすやうに孫寄り来
同年の歌手の老け顔赤のまま

壽命秀次

ポケットに後めたしの栗拾ふ
氏素性解き明かすかに大根選る

杉村福郎

混浴と知らず瞑目紅葉谷
朝寒や小水あふる紙コップ
隠れてはばあと顔出し神の留守

高田敏男

マスク客防犯カメラ見逃さず
モデルさん一部隠して冬扇
惜しみ無く葉色々木の葉髪

高橋真紀子

青首をさらし大根畑かな
大根配り出来立てのホヤホヤと
レンタルの衣装に着られ七五三

田代青山

ヒトラーにちよび髭芋虫に大志
水上り鴨は木沓になりすます
巾着のやうな口もとと熟柿吸ふ

田中章子

佐藤古城

終ひには素手で押しけり雪まろげ
襦袍ぬぎ牛蒡のやうな亭主かな
母さんの蹴出しに潜るマスクの嬰

佐野ゆきこ

風向きで電車の音冬つげる
深呼吸今朝のにおいは秋だ
風吹いて落葉ついてくる夜の道

首藤虎男

湯殿にて女房手出し袖丸裸
前相撲道化仕種で客湧かせ
誇らしく世子引連れ七五三

白井道義

今生に未練たらたら木の葉髪
一日を主役で通し七五三
老いらくの恋のきつかけ松手入

高田菲路

着替へして靴で御帰還七五三
七五三鹿に好かれて泣き出しぬ
祖母ありてこそその段取り七五三

高橋素子

モナリザの謎解けぬまま冬に入る
昏れてゆく空にともして木守柿
枯葉舞ふ着地に躊躇するごとく

田代青波

菊花展もれなく賞に輝ける
芋虫の菜食主義でありながら
木の葉散る行方不明者掲示板

谷むつみ

烏瓜どこか似たるやネックレス
狒犬の胸を張りたる松の内
クリムトの喜びそうな初日の出

種谷良二

猫舌の男おののく焼芋に
ロボットの悩み聞きたし冬の夜

飛田正勝

忙しくてをりますと書く賀状
初富士の見へぬ東京富士見橋
おれおれと言ふ子の居ない年惜しむ

中沢荘荷

寄鍋に胃ぐすり置かれ妻は留守
すきま風話の糸口失えり
道行の舞台の裏の隙間風

根岸敏三

目の前を悠悠たりし冬の蠅
鮫鱧の隙の構えで吊されし
メタボでも丸くなりたし懐手

彦阪義久

虎落笛あれは巨人が吹く笛か
沢庵の色でありけり石路の花
ただならぬ時代にとまる冬の蠅

藤岡蒼樹

銀杏落つ素早く帽子脱ぎたる子
初雪や自転車蛇行大刀魚の
小春日や熬子の黴を箕にひろぐ

日根野聖子

はらはらと泣くやうに散り山茶花は
石路咲くや古びし庭に溶け込まず
二トてふ若者のみで勤労感謝の日

堀川亮二

ふんばつて糞する双子冬の朝
脇見して気付きし木瓜の返り花
神頼み今は止めよう神無月

松井 勉

無礼講宴の後の冷まじき
栗飯の栗の個数を目で数え
銀杏の宝探しよ茶碗蒸し

永島唯男

神無月無神論者に山の神
励ましの言葉いらぬと冬帽子
へなへなになれば上々干大根

西をさむ

自販機が喋る勤労感謝の日
先生の胸を弄る白兔
冬眠の蛙に目玉貸してやる

原田 曄

泪目の子が手を引かれ七五三
構内は徐行を厳守紅葉散る
玄関の犬に吼えらる赤い羽根

藤森荘吉

変装をしてるつमोरのマスクかな
長き夜の昼夜逆転再逆転
顔までもヌーボーとする新酒かな

藤原セツ子

紅葉の手裏剣病窓の空に舞ふ
一步ためらふ境内の散紅葉
月の舟胸の思ひを乗せよう

二神重則

青すすき朝の射す陽を腰でよけ
虹の橋渡る者なき山の秋
救急車木枯しの中犬が呼ぶ

前川敏夫

病院を今日は休んで日向ぼこ
黑白茶同居世帯の木の葉髪
煮えきらぬ話や寄鍋煮えたぎり

三塚美恵子

夫留守の去年より疲れ大掃除
色付いたまゝ濡れ落葉とは寂し
懐手組んで才智のあるごとく

炊き出しに真つ先駈け冬鴉
毛糸編む網目模様の媪の手
野良猫の屯所はダクト冬の街

村上美和

虫倉蟬音

牛鍋や眉間の皺の解けをり
星を目に置いて微笑む寒の月
フィナーレの柿花火なる里静か

爪立てゝ恋路邪魔する炬燵猫
焼詣の残るは香のみ不意の客
着ぶくれと何度も口にやゝメタボ

森岡香代子

百千草

尻餅の証拠となりぬ濡れ落葉
別嬪に仕立てあげられ里の柿
ストーブを背中にしよつて歩きたい

気まぐれを装ふあいつ返り花
ぢやんけんのちよきだけ出す子花八手
世の中は三段跳びで冬に入る

山岡冬岳

山下正純

煤逃げの碁敵同士なりしかな
大仏の鼻の穴にも煤の竹
我が家では煙突もないクリスマス

風力であいさつエコな秋桜
木漏れ日を残して去りぬ秋の蟬
黒ひ実を潰し日のあり夕化粧

山本あかね

山本けい子

股引きの乾き切らざるまま暮れぬ
赤門の前で止りし焼芋屋
書き終へて差す目薬や返り花

いそいそと我を追ひ抜く落葉かな
天日干のふぐ鱈見張り偽鳥
触れれば落ちさう鳶の烏瓜

山本 賜

吉田恵子

ラジオ体操秋思の首を右左
枯蓮や上野の池のミステリイ
篤姫がここにも居りぬ菊花展

アンテナに飛行機止まり天高し
楊枝刺し最後の柿の競いあひ
末席は特別参加秋の蠅

吉野香風子

横山喜三郎

恋猫の切られの與三となりもどる
豊の秋國民服の捨案山子
熊の出し嚙へ蕎麦を刈り急そぐ

尼寺に白肌さらし干大根
カレンダーめぐりそびれて十二月
吟行に猿もつきくる紅葉山